



形態統語論的変遷、パーリ語仏典逐語訳 (nissaya Burmese) 調の文体や欧文脈 (英語調) の文体の影響などについて、ビルマ語の変遷を跡付け、16 世紀以降、WrB がどのように形成されていったかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 以下の作業から 12/13 世紀・16 世紀・18 世紀の散文のビルマ語の特徴をおさえることにより、ビルマ語の変遷の大筋を把握する。

散文を中心にビルマ語の変遷を辿ろうとするのは、韻文に特有な修辭的制約から離れて、より自然なビルマ文を考察の対象としたほうが、ビルマ文語の変遷を探るという目的に合致していると考えからである。

ビルマ語最古の散文の古典文学作品でインワ期の *paaraayana watthu* (彼岸への道物語)(1511 年)【以下 P と略記】のビルマ語を調べる。

パガン期(12/13 世紀)の古ビルマ語 (OB) とインワ期の *paaraayana* 物語にみられるビルマ語との違いを比較考察する。

コンバウン期の *ratanaa kre:muM nan:twang: jaatto\_krii* (宝の鏡 宮廷戯曲) (1750 年代)【以下 RK と略記】のビルマ語を調べる。

(2) さらに次の点に考慮して、ビルマ語の変遷の細部をおさえる。

14/15 世紀のピンヤ=インワ期の碑文により、12/13 世紀から 16 世紀初頭に至る過渡期のビルマ語を把握する。

17 世紀、19 世紀、20 世紀の代表的なビルマ文を調べ、nissaya 調や欧文脈調(英語調)を含む、各時代のビルマ語の特徴を把握する。

### 4. 研究成果

(1) ビルマ語の変遷(ビルマ語史)を概観すると、次のようになる。

前ビルマ語 pre-Burmese (11 世紀以前、ビルマ語資料なし、比較言語学の対象)

古ビルマ語 Old Burmese (12/13 世紀のパガン期碑文・墨文のビルマ語)

ビルマ文語 Written Burmese (16 世紀以降のビルマ古典文学作品のビルマ語) 世紀刻みで、代表的な散文の文学作品乃至は紀行文を示せば、以下のようなものがある。

ア) *paaraayana watthu* (彼岸への道物語) 16 世紀、- 最古の散文古典文学作品

イ) *maNikuNDala watthu* (摩尼珠の耳環物語) 17 世紀

ウ) *ratanaa kre:muM nan:twang: jaatto\_krii* (宝の鏡 宮廷戯曲)

エ) *kang:wam mang:krii: landan mruai. swaa:*

*ne.cany\* mhattam*: (関所奉行ロンドン訪問日記) 19 世紀

オ) *chany\*pong ywaksany\* mong mhuing*: (チンバウン草売りのマウン・フマイン) 20 世紀

(2) ビルマ語の変遷の主流を把握するために、パガン期ビルマ語碑文(12/13 世紀)、インワ期の *paaraayana* 物語(16 世紀)、コンバウン期の *ratanaa kre:muM* 宮廷戯曲(18 世紀)を選び、OB から WrB への変遷の過程、WrB の変遷と熟成の過程を以下に述べる。

なお、16 世紀は散文文学の始まりの時期であり、18 世紀は、欧州のビルマ旅行記や清代の華夷訳語からも、音韻と語彙に限られるものの、ビルマ語の変わり目の時期であることが分かる。

### (3) 綴り字と音韻

綴り字とそれが表わそうとする音とのあいだには一定の関係があることは確かである。しかし、新しい言語を書き表わすのに、ある文字体系が取り入れられたとき、その文字がもつ伝統的な音 (= 文字の表わす音質\*) が、そのまま、新しい言語の音韻を表わしていると解釈してはならない。

OB.het (Myazedi 碑文、1112 年)ほかに yhat, hyat, yhac, rhec, yyac, sshac, shyac がある。「ハ」WrB.rhac。また、OB.hi, hiy', hi', hiy「ある、いる」WrB.rhi。文字 < h > は OB でも無声門摩擦音を表わしていた。参考:mahaa < パーリ語 mahaa「大」\*。「ハ」や「ある、いる」の頭子音を h- で書き写したのは、書記言語の歴史が浅いころのビルマ語では、無声前部硬口蓋摩擦音の書き方に苦慮した結果、その近似音を表わす文字 < h > で代用したものと考えられる。のちに、< r h > の表記に置き換わり定着してゆく。

\*, \*\* 西田龍雄(1955, 1972)

(なお、「字音質」sonus *grammae*, letter-sound: 三省堂『言語学大辞典』第 6 巻、術語編、1966, pp.625-626[藪執筆]参照) OB と WrB とのあいだに認められる次の対応はよく知られている。

OB. -iy, -uy > WrB. -e, -we

kl-, pl- > ky-, py-

(khl-, phl, ml-も同様に)

OB.-iy > WrB.-e は、一般に、口語(SpB)(ヤンゴン=マングレー方言)の /-ei/ に対応するが、次の環境において、ときに /-i/ に対応し、変化の通則から逸脱した例がある。

(通常) -iy -e は SpB. -ei に対応する。

(例外)-iy SpB. -i/[+舌頂性, -前方性]\_\_\_\_\_

(OB.-iy:WrB.-i ~ -ii の対応から -iy の音価は [i] と推定できる。OB.kharii ~ khariy,

WrB.kharii, SpB.kh@yi「距離」)

口蓋化子音の後ろで、ときに、OB.-iy :

WrB.-e : SpB.-i の対応がみられる。

OB.kriy,WrB.kre:,SpB.ci^ 「胴」  
(cf. Azi kyi, Nusu gri)  
a-ci-y' a-ce. ?@si' 「種(たね)」  
(cf. Azi ?@ci', Nusu ji\_(核,仁))

ほかに、  
WrB. khye:, khre, ce.-, mre:, re-  
SpB. chi^, chi, si', myi^, yi-  
「糞」「足」「塞ぐ」「孫」「数える」  
などの対応例がある。以上の語は OB.-iy は  
WrB.-e と一様に綴られることになったが、OB.  
の段階の音がそのまま保持されたものと考え  
られる。(藪 1995,p.246)

OBの頭子音に有声の破裂音・破擦音はあつ  
たか。OB.g-,d-,b-;j-は、パーリ語の人名地  
名など固有名詞の表記以外では、形態素連続  
において生じたとみられる連濁(sandhiの一  
種)を表記したと思われる例がわずかに見つ  
かるだけである。OB. kuu「寺院(窟院)」は  
パーリ語の guhaa に由来する語である。直接  
には古モン語(OM)guoh~guh~gohからの借  
用であるが、頭子音k-で取り入れたのはOB  
においてはg-が馴染みのない音であったか  
らである。この語はビルマ人仏教徒にとって  
日常よく使われる基本語彙の一部をなして  
いたと考えてよい。(藪 2004、藪 2006 に再録  
p.23)パーリ語起源の高級語彙やパーリ語  
固有名詞は、原語どおり、その有声頭子音は  
有声の子音で表記したが、当時の口語にお  
いて、それを有声音で発音していたかどうか  
わからない。因みに、OB.kuuはWrB.ではguu、  
SpB.でも/gu/となっている。

#### (4) 語彙

saa:「子」の用例は、現代ビルマ語でも  
saa: ?@pha.「父子」、saa: ?@mi.「母子」、  
saa: ?ein「子宮」、saa: puikkong「カンガ  
ル」などの造語成分としてみられるが、【P】  
には次の用例がある。saa: yokkyaa:「男の  
子、息子」、saa: min:ma「女の子、娘」、ま  
た、【P】saa: khyac「愛息」、samii: khyac「愛  
娘」のように、主要語(head)+限定語(attribute)  
(=被修飾語+修飾語)の語順をとる複  
合語があるが、これは現代語の suukhui:「盗  
人」(人+盗む)、luunaa「病人」(人+病ん  
でいる)と形態統語構造を同じくする。

【P】saTHe:(<パーリ語) set.t.hi  
「富豪」が頻出するが、のちに【RK】suuTHe:  
(緬巴混淆転訛語)に置き換わる。seTHe:と  
いう語形も、初期の文語形式として、他の古  
典文学作品に表れる。また、【P】samudraa「大  
洋」(<Skt 梵)は、現代ビルマ語では WrB.  
samuddaraaにあたるが、これは梵巴混淆語で  
ある(巴 samudda)。また、prajnyaa「智慧」  
(1112 Myazedi 碑文)(<梵)は、それ以降の  
OBで、panyaa(<巴 pan~n'aa)に置き換わ  
る。WrBでは【P】【RK】を含むすべての古典  
典籍において、パーリ語借用形式が採用され、

サンスクリット借用形式が再び用いられる  
ことはなかった。

インワ期には、現代語には見られない語形  
や意味の語がある。

【P】nhuing: rhany.-「比べる」 現代 WrB.  
nhuing: yhany\*-、  
sim: pakaa:-「保持する」 現代 WrB. thim:  
sim:-、  
khangpwan:「友だち」 現代 WrB.「夫」

#### (5) 統語 - 文法形態素とその機能

動詞文に現われる文末形式のうち、現実法  
(realis)を表わすものとして、【P】では-i.  
(<OB.-e')が優勢で、-sanyの使用例はなく、  
-sa tany:が散見される。【RK】では-i,-sany  
が並用(1800年前後に追補された最後の2章  
では-sanyが圧倒的に多用)され、-sa tany:  
も用いられる。

(例)【P】~hu many i.//「~と名づけられ  
た」、khyii:mwam: sa tany://「賞讃したの  
である」、【RK】~hu lhyok tang sany//「~  
と申しあげた」

WrBにおいて、-i., -sany(>SpB.-ye',  
-te)は、細かい点で微妙な意味の違いを担っ  
ていたものと考えられる。現代語では、後者  
がふつうに用いられ、前者は微妙に違った意  
味合いをもつことになったのであろう。

-tany:は断定を表わす。-sa tany:(<-sany+  
-tany:)「~ノデアル」

動詞文に現われる文末形式のうち、非現実  
法(irrealis)を表わすものとして、【P】では  
-aM. sany, -aM. sa tany:, -lataM.(<-lat  
aM.)用いられ、-manyの使用例はない。

【RK】では-many, -aM.の併用もあるも、その  
例は少ない。-aM.は単独以外に-aM. sany,  
-aM. sa- (注記:-sa-<-so<-sany)のか  
たちで出てくる。

(例)【P】rahan: pru le aM. sany//「得度  
させるだろう」、ma se pai ne aM. sa suu kaa:  
ta yok mhya ma rhi//「死なずにいるあろう  
人はひとりもない」(-sa-は上の注記参照)

【RK】bhuraa: kywanma tang paa many//「女  
の仏塔奴隷を献上するであろう」

-aM.が非現実法を表わす機能を担ってい  
るが、-sanyに接続する例が少なくないこと  
が興味深い。初期のWrBには、現代語にみら  
れる-sany/-many(>SpB.-te/-me)が《現実  
法/非現実法》の文法機能を分担する方式は  
まだ生まれていなかったことが分かる。

-tany:《断定、強調》

【P】上述のように文末に用いられるほか、  
文中にも出てくる。この文中の用法はOBに  
すでに見られるが、【RK】にはない。

(例)【P】saa: min:ma kui tany: chum:ma mu  
kaa: ~//「娘に教え諭せば~」、ii  
sui. tany://「かくの如しなり」

luu tany: phrac muu kaa: ~ // 「俗人であれば」【OB】iy kuu purhaa lhot su rhow nhik teh ~ // 「この寺院(窟院)を寄進した折に」(注記: OB. -teh > -teny > WrB. -tany:)

-lat ((?)euphonic)

【P】chwan: bhuny\*: pe: khaa tan lat so\_ ~ // 「(僧侶が)食事をなさる時になると」V-lat so\_ は nissaya ではパーリ語の現在分詞・過去分詞の語形に対応した訳語となっている(Okell 1965, p.215 参照)。

-lataM. (< lattaM. < lat+aM. の縮約形)もよく使われる。【P】ma re twak nuing 'ong phrac lataM. // 「数えられないほどになるだろう」

-sa tat 《伝聞》「~ そうだ/とさ」

【P】ii sui. lhyang chum: ma sa tat // 「かくの如く教え諭したようだ」

V-sa tat // は nissaya においてパーリ語 -kira に対応している(Okell 1965, p.218)。

-kou 《対格》 / - 'aa: 《与格》

ビルマ語文語を扱った文法書(例えば Judson, Lonsdale, Pe Maung Tin など)では、格助詞の項で、まず上記のような説明がなされる。そして、時として両者とも対格・与格のいずれにも用いられる旨の付記がなされている。確かに、現代文語における用法はこのとおりである。

nissaya において、このふたつの格助詞はパーリ語名詞の対格と与格に対応している(Okell 1965, p.199)。

ところが、【P】にも【RK】にも、【P】に見える nissaya texts の引用箇所を除いて、- 'aa: の使用例はほとんどない。

【P】に、文末助詞(連語) -sa lhyang ka tany: 《? 強調、? 感嘆》がしばしば現れるが、その文法機能は詳らかでない。ngaa. thaa: thak cwaa sa lhyang ka tany: // 「吾が刃はよく斬れるのだ」

【RK】では、会話でない地の文に口語的な表現が散見される。

'ayaa ma thang ce ra paa bhuu: // 「痕跡を頭わにさせてはならぬ」(-bhuu: 補助否定辞)

naa: thong to\_muu paa 'uM: // 「殿下、お聞きくださいませ」

(6) ビルマ語史の研究に、パガン期のビルマ語碑文はともかく、それ以降のビルマ古典文学作品を研究資料とする本格的な試みは、外国人研究者はもとより、ビルマ国内でもいまままでなされてこなかった。この研究の作業の過程でビルマ人研究者からも、国際学会で外国人研究者からも、ビルマ古典文学作品を文学としてのみならず言語資料として研究対象とするこの試みに、やっとな本格的に取り組むことになった意義が高く評価された。

ビルマ語史は、12/13世紀、16世紀、18世紀のビルマ語を軸にして、ビルマ語変遷の大

筋を把握し、そのあいだを埋める細かい言語事実を検証してゆくことで、全体像を描き出すことができるだろう。19世紀、20世紀の近代ビルマ語が、西洋の大きい影響を蒙って大きく変わったか変わらなかったかを十分検証する必要はある。しかし、ビルマ語史の根幹は、やはり、上記の3つの時代のあいだのビルマ語の変遷を跡付けることで十分掴めるものとする。12世紀以来のビルマ語の変化は意外に緩やかなものであった。

参考文献

[TEXTS]

E Mong, Uu:(1958). *PugaM Kyokcaa Lakrwe:cang*// Rangoon: Pyinnya Alin Pya Book Shop. (U E Maung 『パガン碑文選集』)

Rhang MahaasiilawaMsa// *Paaraayana Watthu*// Rangoon: Hanthawaddy Press, 1970(3rd ed.)// (Shin Mahathilawuntha 『彼岸への道物語』)【P と略称】

Rhwetong Siihasuu// *Ratanaa Kre:muM Nan:twang: Jaattokrii*// Rangoon: Hanthawaddy Press, 1968(4th ed.) (Shwedaung Thihathu 『宝の鏡宮廷物語』)【RK と略称】

NOTES to two classical proeses in Burmese literature:

Paaraayana watthu (abbreviated to P), "A Way to Nirvana", is the earliest prose other than lithic inscriptions, and was written by Shin Mahathilawuntha, a well-known Buddhist monk writer, in A.D. 1511(16c.). It consists of four instructive stories that eight Buddhist ascetics, both priest/priestess (bhikkhu/bhikkhuni) and laymen/lay-women (upaasaka/upaasikaa) practice ascetic exercises.

Ratanaa kre:muM nan:twang: jaatto-krii: (abbreviated to RK), "Treasure Mirror", was written by Shwedaung Thihathu in A.D.1750's(18c.). It is a secular and interesting story of Prince Eindakonmar and Princess Welumyatswar, which seems to have amused the readers chiefly at Burmese Court. This story is composed of eleven chapters, the first nine of which were written by Shwedaung Thihathu, but the last two chapters were later added by Khonmin U Tha before or after 1800.

Luce, G.H.(1981). *A Comparative Word-list of Old Burmese, Chinese and Tibetan*. London: SOAS.

Nishi, Yoshio(西 義郎)(1999). *Four Papers*

*on Burmese: toward the history of Burmese (the Myanmar language)*. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.

西田龍雄(1955)「ミヤゼディ碑文における中古ビルマ語の研究(1)」『古代学』4:1.

(1972)『緬甸館訳語の研究 - ビルマ言語学序説』華夷訳語研究叢書、松香堂。

Okell, John(1965). "Nissaya Burmese: a case of systematic adaptation to a foreign grammar and syntax." *Lingua* 15, 186-227.

Okell, John & Anna Allott(2001). *Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*. UK: Curzon Press.

Phe MoN TaN, Uu:(2003). *Mranmaa Caape SamuiN:// Rankun/ Capay Uu: Caape Phyan.khyiire://* 5<sup>th</sup> ed. (Original ed.: Jambuu. Mitchwe, 1938-39) (Pe Maung Tin 『ビルマ文学史』)

藪 司郎(1995)「ビルマ文語の母音 e について」(懇話会例会発表要旨)『言語学研究』14号、246頁、京都大学言語学研究室。

(2004)「ミヤゼディ碑文における古ビルマ語覚書」*Ex Oriente* 11, pp.59-103. 大阪外国語大学言語社会学会。

再録：藪 司郎(2006)『古ビルマ語資料におけるミヤゼディ碑文(1112年)の古ビルマ語』科研基盤研究(C)「古ビルマ語の形成に関する研究」研究成果報告書 (iv)+84pp.) pp.1-45. 大阪外国語大学。

'Un: Rhwe, Uu:(1956). *SatpuM Abhidaan mitlaNcuM // Rankun/ PaNYaa 'alaNpra caa puM nhip tuik//* (U Ohn Shwe<sup>『</sup> [ビルマ語] 正書法辞典』)

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 3件)

藪 司郎、「ビルマ語研究と言語学」、大阪大学外国語学部・大学院言語文化研究科最終講義、2009年2月14日、大阪大学箕面キャンパス (講義要旨は広報誌『阪大NOW』No. 111(2009)に記念講義[短報]として掲載予定)

藪 司郎、「古ビルマ語(0B)からビルマ文語(WrB)へ ビルマ語史の世界」、京都大学言語学懇話会第78回例会、2008年12月20日、京大会館(京都市左京区) (発表要旨は『京都大学言語学研究』第28号(2010年)に掲載予定)

Shiro YABU, "A historical study of the

formation of Written Burmese(WrB)---with special reference to the contrast between *paaraayana* (16c.) and *ratanaa kre:muM* (18c.)" The 41th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL#41), 18 September 2008, School of Oriental and African Studies (SOAS), University of London.

## 6. 研究組織

研究代表者

藪 司郎 (YABU SHIRO)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：30014509